

[原著論文]

## 教材としての『日本霊異記』論序説

工藤 浩\*

### The Introduction to the Tale of “Nihon-Ryoi-Ki” as Teaching Materials

Hiroshi KUDOH\*

#### Abstract

“Nihon-Ryoi-Ki” is the oldest persuasive stories in Japan. It has not been used as teaching materials in high school Japanese classes. Therefore, I would like to clarify its potentialities as teaching materials and demonstrate a lesson plan.

**KEY WORDS :** “Nihon-Ryoi-Ki”, persuasive stories , teaching materials

#### 1 はじめに

高等学校の国語総合、古典A、古典Bの授業に於ける説話文学教材としては、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』などを先ず挙げることができる。平安時代末期に成立した『今昔物語集』を除けば、何れも13世紀、鎌倉時代の説話集である。本稿で採り上げる『日本霊異記』は管見の限りでは教材として扱われることは従来は殆んどなかったと言うべきである。ここでは、『日本霊異記』の持つ古典（古文）教材としての可能性について考えてみることにする。

#### 2 『日本霊異記』研究の現状

『日本霊異記』は、正しくは『日本国現報善悪霊異記』と称し、平安時代初期にあたる9世紀に薬師寺の私度僧景戒の編んだ現存最古の説話集である。後続の『三宝絵詞』以降の説話集とは異なり、本文が漢文で表記されている点に大きな特徴があり、日本文学では主に上代文学の研究対象とされてきた。戦後のテキストと

しては、日本古典全書（昭和25年 朝日新聞社）、日本古典文学大系（昭和42年 岩波書店）、日本古典文学全集（昭和50年 小学館）、日本古典集成（昭和59年 新潮社）など、索引は春日和夫・原栄一共編『日本霊異記漢字索引』（昭和50年 桜楓社）が存しており、八木毅、中田祝夫、黒澤幸三、守屋俊彦、入部正純、多田一臣などによって『日本霊異記』を対象とする研究書が発表されていた。

平成期に入ると、『日本霊異記』の研究が俄かに活況を呈し始める。新編日本古典全集（平成7年 小学館）、新日本古典文学大系（平成8年 岩波書店）、ちくま学芸文庫（平成10～11年 筑摩書房）などのテキスト、工具書として藤井俊博編『日本霊異記総索引』（平成11年 笠間書院）も揃い、小泉道『日本霊異記諸本の研究』（平成2年 清文堂）の書誌研究を加えて整備された研究環境の中で、『日本霊異記』の研究書が続々と刊行される状況が生ずる。朝枝善照『日本霊異記研究』（平成2年 永田文昌堂）、丸山顕徳『日本霊異記説話の研究』（平成4年 桜楓社）、宇佐美正利『日本霊異記とその時代』（平成7年 おうふう）、中村史『日本霊異記と唱導』（平成7年 三弥井書店）、

\*九州共立大学共通教育センター

\*Kyushu Kyoritsu University

河野貴美子『日本霊異記と中国の伝承』（平成8年 勉誠社）、永藤靖『日本霊異記の新研究』（平成8年 新典社）、多田伊織『日本霊異記と仏教東漸』（平成13年 法蔵館）、小峰和明・篠川賢編『日本霊異記を読む』（平成16年 吉川弘文館）、山口敦史『日本霊異記と東アジアの仏教』（平成25年 笠間書院）などである。書名からも、日本文学としての研究のみならず、仏教史、比較文化等多方面からのアプローチもなされつつあることが窺われ、『日本霊異記』研究は一定レベルの成熟を見ているといえることができる。

### 3 教材としての『日本霊異記』

前節では、信頼できるテキストが提供され、訓詁注釈も定まってきた『日本霊異記』をとりまく外的な状況を確認した。本節では高等学校国語の古典（古文）教材としての可能性という、当該文献の内的要素を考えてみたい。

『日本霊異記』は上・中・下の三巻から成り、それぞれの巻には35縁・42縁・39縁の説話が配されている。採録された説話の性格として、唱導性を持つことが指摘される<sup>1)</sup>。唱導とは民衆を仏道帰依へと教え導くための布教活動のことである。布教は、専ら法話の場で聴衆に対して行われたため、所収の説話は口承性を持つのであるが、説話集として編纂され、文字化された以上は、『三宝絵詞』などの後続説話集に対しては、書承の形で影響を及ぼしたことが明らかである<sup>2)</sup>。冗長化した話、ふざけの出た話、舌足らずになった話など、ある種の稚拙さを含み持つことになった要因には、口承の弊害があったものと考えられる<sup>3)</sup>。だが、こうした負の評価とは逆に、その場の雰囲気に合わせて民衆を興味づけて納得させるための面白みや明快さ、単純さといった要素が、口承性によって多くの所収の説話には自ずと備わっていったのである。結果として、『日本霊異記』高等学校の教材としては、使い勝手のよい説話を多く含み持つに至ったとも言うことができる。

『日本霊異記』を教材としての利点は次の三点に集約できる。

- I. 説話内容が平易かつ明確で、編者の意図の理解が容易なこと。
- II. 分量的にも、高等学校の古典の授業の配当時数に適する説話を選べること。
- III. 文学史・日本語史・文化史的価値があること。其々に対して若干の説明を加えれば、先ず I

は、端的に言って仏・法・僧の所謂「三宝」の重要性を説くという内容である。勿論のこと、必ずしもこの点だけが『日本霊異記』説話に共通する内容という訳ではない。力人譚（上巻第3縁、中巻第4・7縁）髑髏譚（上巻第12縁、下巻第1・2・7縁）など、直接的には仏教の教義には結びつかない話柄を持つものもある。また、冥土・地獄譚（上巻第30縁、中巻第7・16・25縁、下巻第22・23・35・36・37縁）、修行譚（上巻第26縁）、放生譚（中巻第5縁）のように、三宝の重視そのものを説いてはいない仏教説話もある。こうした内容の説話の中にも、教材として相応しい内容を持つものも多いのも事実である。しかしながら、唱導の目的を高校生に伝え難いものは、一先ずは本稿で扱う範疇からは除くことにする。また、三宝を扱いながら因果を身体の変異で示すような差別的な内容を含んだり、邪淫を主題とする説話など、教材としては不適切なものも多々ある。こうしたものは除外するとしても、『日本霊異記』には教材として相応しい説話が相当数収録されているのである。IIについては、通常のA5版乃至はB5版の教科書に換算して、一つの説話が1～2頁から多くても3～4頁程度で完結するものが多い。従って、授業を実施する学年・クラスや時期、生徒の実態、配当時数の多寡などの要素に適した教材を選択することができるのである。IIIは、前節でもふれた『日本霊異記』の文学史的な位置に負うところである。平安時代初期の作品でありながら、ひらがな表記が確立する以前の時期に編まれたため、『古事記』『日本書紀』『万葉集』『風土記』『懷風藻』などの上代文学作品のように漢字のみで書かれた点に大きな特徴があるのが第一点である。写本の複製や、原文表記をプリントやパワーポイント等で示しながら、文字や表記の歴史を説明することができる。次に、仏教説話集としては最古の作品であることが第二点として挙げられる。『古事記』『日本書紀』のような上代文学作品は、アマテラスを頂点とした天神・地祇を祀る神道を背景に有しているが、仏教公伝以来最初の説話集であることが、上代から中古への移行期の作品としての特異な文学史的或いは文化史的意義を有しているのである。

### 4 『日本霊異記』を教材とした授業展開

本節では、これまで述べてきたことを踏まえて、『日本霊異記』を教材とした高等学校における国語の授業展開の例を、教案を示すことで具体的に提起してゆきたい。教材には、三宝のうち「仏」の重要性を主題と

する中巻第23縁「弥勒菩薩の銅像、盗人に捕られて、霊しき表を示し、盗人を顕す縁」を採り上げる。盗人が尼寺から盗み出した仏像を石で打つと声を発した霊験譚である。本来は肉体を持たない弥勒菩薩の像<sup>4)</sup>を敬うべきことを説くという内容である。

対象；2 学年古典A

教材；『日本霊異記』中巻第23縁「弥勒菩薩の銅像、盗人に捕られて、霊しき表を示し、盗人を顕す縁」

※次のプリントを配布する。(実際に配布するプリントは縦書きである。)

#### 古典（古文）教材

#### 日本霊異記

1 弥勒菩薩の銅像 盗人に捕られて霊しき表  
を示し盗人を顕す縁 第二十三

聖武天皇の御世に、勅信、夜を巡りて京の中を行  
る。其の半夜の時に、其の諾楽京の葛木尼寺の  
前の南の慕原にして哭き叫ぶ音有りて言はく「痛き  
かな、痛きかな」といふ。勅信聞き、馳せ陳ねて見  
れば、盗人弥勒菩薩の銅の像を捕り、石を以ちて破  
く。打ち捉へて問へば、答へ白日さく「葛木尼寺の  
銅の像なり。」とまをす。此の像を寺に置き、然う  
して彼の盗人を官に送り、圀圀に閉囚ふ。夫れ  
理法身の仏は、血肉の身にあらず。何ぞ痛む所有ら  
む。ただ常住不変を示す所以なり。是れまた奇異し  
き事なり。

(中巻第二十三縁)

註 1、弥勒菩薩一釈迦入滅後、五十六億七千年後にこの世で衆生を救済する仏。 2、夜を巡りて一夜警のために巡り歩いた。 3、馳せ陳ねて一大勢が駆けつける。

4、圀圀一牢屋。 5、閉囚ふ一捕えて収監した。 6、理法身一三種法身（理法身、智法身、理智無礙法身）の一。弥勒菩薩も、本来は仏法の顕現としての仏身であって、血肉を備えた人身は持たない。

日本霊異記 成立年は未詳であるが、9世紀に薬師寺の私度僧景戒の編纂した最古の仏教説話集。原文は漢文表記されている。新日本古典文学大系の訓読を掲げた。

単元の目標；

- (1)漢文訓読調のリズムを読み味わい、説話に関心を深める。
- (2)自らの知識や体験に基づいて、内容を正しく捉える。
- (3)ひらがな成立以前の我が国に、中国の文化がもたらした影響を考える。

学習指導案は次頁に掲載。

評価；

- (1)漢文訓読調のリズムを読み味わい、説話に関心を持つことができたか。
- (2)自らの知識や体験に基づいて、内容を正しく捉えられたか。
- (3)我が国に、中国の文化がもたらした影響が理解できたか。

## 5 まとめ

これまで、『日本霊異記』を古典（古文）の教材として扱った授業展開を提唱してきた。筆者自身も、勤務していた東京都立高等学校において、平成23年度までの10年余りに亘って『日本霊異記』を教材とした授業展開の試行を実施してきた。生徒の反応を見る限りは、従来の教材を用いて行った際と、さほどの違和感を持つこともないように見受けられた。授業評価アンケートでも、特に内容に関する質問項目に対して、「理解できた」「興味が持てた」といった概ね肯定的な感想を確認し得たことを付言しておきたい。

作品としての文学史上の扱い、大学入試問題では出題例は皆無と言ってよいことなど、問題点も多く存していることは確かである。しなしながら、ひとまずは『日本霊異記』が、極めて適切な高等学校の古典（古文）教材であるという感触を持ち得たことを以て結論としたい。今回は「仏」を主題とする説話を選んだが、『日本霊異記』に採録された「僧」を尊ぶべきことを説く説話については、稿を改めて論じることとする。

Received date 2014年1月7日

## 参考文献

- 1) 植松 茂 (1956)：「日本霊異記における伝承者の問題」, 国語と国文学, 33-7  
小島瓊禮 (1958)：「日本霊異記と唱導文芸」, 國學院雑誌59- 6  
後藤良雄 (1962)：「冥報譚の唱導性と霊異記」, 国文学研究25  
正野光子 (1972)：「霊異記説話の伝承伝播の諸問題」, 大谷女子大文2  
中村 史 (1995)：『日本霊異記と唱導』, 三弥井書店
- 2) 高橋 貢 (1968)：「日本霊異記の説話伝承をめぐって」, 国文学研究38に、『日本霊異記』が後世に口承・書承の両面で継承されたことは詳しい。

3) 長野一雄 (1986): 「説教話としての資質」, 黒澤幸三編『日本霊異記—土着と外来—』三弥井書店 p162

4) 高田 修 (1987): 『仏像の誕生』, 岩波書店  
長岡龍作 (2009): 『日本の仏像—飛鳥・白鳳・天平の祈りと美—』, 中央公論社

学習指導案 (三時間扱い)

	指導内容	学習活動	指導上の留意点
第1時	<p><b>導入</b> (5分) 作品について理解する。</p> <p><b>展開</b> (40分) 漢文訓読のリズムに慣れる。</p> <p>本文の書写</p> <p>難解語句の確認。</p> <p><b>まとめ</b> (5分) 作品について確認し、次回の予告をする。</p>	<p>作品の説明の指名読みを聞き、板書をノートにとる。</p> <p>本文の指名読み。</p> <p>ノートに3行ごとに本文を写し、難訓語句にはルビをふる。</p> <p>指名して、難解語句を確認し、本文に傍線を引く。</p> <p>ノートで確認する。</p>	<p>板書で、作品の成立と特徴、同時代の歴史事象などに言及しつつ要領よく纏める。</p> <p>反復して読み、漢文訓読のリズムを意識させる。ルビのふられたものも含めて、難読の漢字の読み方を確認する。</p> <p>右に註、左に字数を要する口語訳を書くことを説明し、字間の余裕を持って本文を写すよう最初に指示する。作業中は、机間巡視してノートの取り方を確認する。</p> <p>生徒の見落とした難解語句も理解しているかどうかを確かめる。</p>
第2時	<p><b>導入</b> (5分) 前時の復習。</p> <p><b>展開</b> (40分) 内容の理解。</p> <p><b>まとめ</b> (5分) 次回の予告をする。</p>	<p>本文の指名読み。</p> <p>一文ずつ指名読みをして、難解語句の意味を確認して註を付す。それを踏まえて口語訳をする。</p> <p>本文が、いくつかの部分に分けられるかを考える。</p>	<p>難解語句の傍線を確認するよう指示する。</p> <p>会話の発話者が誰なのかを考えさせる。</p> <p>弥勒菩薩像は、画像で例を示す。「常住不変」の意味に注意を促す。どこからが後半になるのかを考えてくるよう指示する。</p>
第3時	<p><b>導入</b> (5分) 課題の確認。</p> <p><b>展開</b> (35分) 説話の構成と方法を考える。 1 唱導 2 説話の方法</p> <p><b>まとめ</b> (10分) 中国文化の我が国への影響</p>	<p>本文を前半と後半に分ける。</p> <p>「唱導」について理解する。</p> <p>不自然な記事が置かれた意味を考える。</p> <p>漢字の伝播、仏教思想について理解する。</p>	<p>物語と後日譚に分かれていることを理解させる。</p> <p>唱導について先ず説明し、受講者から「布教」という語を引き出す。</p> <p>仏像が喋る話が布教とどう関わるのかを、幼児に恐怖を覚えた体験等と結び付けて理解させる。</p> <p>固有文字をもたない我が国は、漢字を用いたため、かなが生み出されたことを理解させる。</p> <p>仏教伝来後の、初期の布教の実態を要領よく纏める。</p>